



田島正樹

Tajima Masaki

哲学史のよみ方

CHIKUMA SHINSHO

一見常識的にみえるアリストテレスの哲学でさえも、実際にはいかに「非常識」なものであるかを知ることによって、われわれは精神の自由についていくばくか学ぶとがあると思う。その意味で哲学の修練は、知者をめざすことというより、文字どお自由人の素養と言えよう。.....



ちくま新書

143



ちくま新書

143

哲学史のよみ方

一九九八年二月二〇日 第一刷発行

著者 田島正樹(たじま・まさき)

発行者 柏原成光

発行所 株式会社筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五―三 郵便番号二二一八七五五
振替〇〇二六〇―八―四二二三

装幀者 間村俊一

印刷・製本 株式会社精興社

ちくま新書の定価はカバーに表示してあります。

ご注文・お問い合わせ、落丁本・乱丁本の交換は左記宛へ。

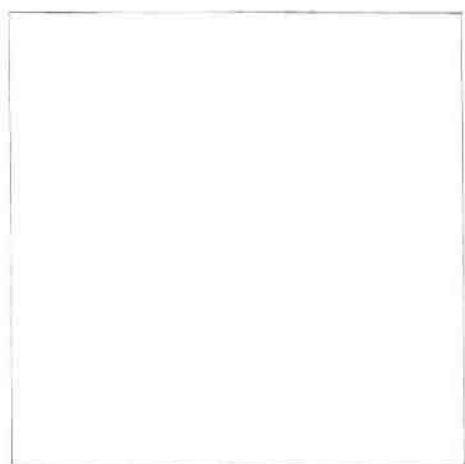
大宮市榎引町二一六〇四 筑摩書房サービスセンター

郵便番号三三二一〇〇五二

電話〇四八―六五二―〇〇五三

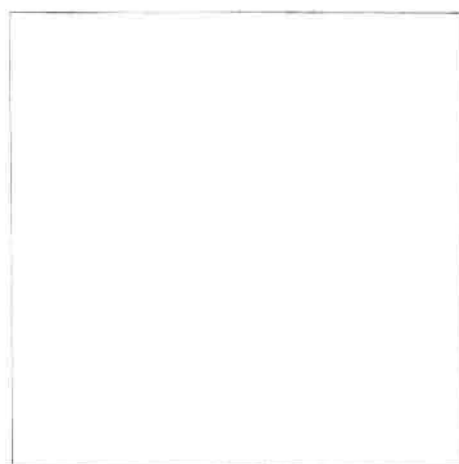
© TAJIMA Masaki 1998 Printed in Japan

ISBN4-480-05743-9 C0210



田島正樹
Tajima Masaki

哲学史のよみ方



ちくま新書

哲学史のよみ方【目次】

狐と狸——真理と虚偽ならびに魂の自由について 009

序 027

第1章 **青春の哲学**——意味の製作モデル 031

1 フッサールから始めよう 034

還元／志向性／志向性の従来の説明／志向的内容の同一性(フレーゲ)

2 デカルトの場合 047

デカルトはむずかしい／方法的懐疑／意図の明証性／検証主義／神の存在証明

第2章 **晩成の哲学**——意味の解読モデル 069

意味の製作モデルと解読モデル

A デカルト対スピノザ 072

心―身問題／倫理^{エチカ}／青春の哲学と晩成の哲学

B 弁証法の系譜 084

1 ソクラテスの場合 084

2 プラトンの場合(弁証法の袋小路) 088

意味の製作モデル／規範的判断をめぐる対話状況／第三人間論／本質への問い

3 アリストテレスの場合 097

学問的説明の始原／信念の変更／本当は自分は何を信じていたのか？／ギリシア的言語観

――ヘロドトスの『歴史』

4 ソクラテス再論(ソクラテスのイロニー) 113

5 ヘーゲルの場合 116

欲望主体の変容／ヘーゲルの歴史認識／主体の歴史と歴史の主体

6 二人のマルクス 126

マルクスの物象化論

第3章 **意味表現の論理形式の系譜** 135

感覚暗号の根源的解釈／共通感覚／言語表現と論理形式

1 魂の定義(アリストテレス) 149

現象の運動

2 存在の意味(一) 160

3 存在の意味(Ⅱ) 163

知覚対象としての存在／存在の論理形式

4 もの(実体)と性質 170

5 因果性のカテゴリー 173

出来事の個体化

第4章 **他者としてのキリスト教** 183

1 カントの場合 185

可能的経験／無限としての物自体／理性の悲劇的運命／創造としての自由／カントの自由論の不十分性

2 他者としての無限性

201

ライプニツクの根本問題／信仰・希望・愛／罪とは何か？

あとがき

213

人名索引

218

事項索引

220

狐と狸——真理と虚偽ならびに魂の自由について

——あらお久しぶりね。

——今日はまた一段とチャールミングな出で立ちで。

——あいかわらず口がお上手ね。

——君の化け方がうまいでしょう。

——最近何してるの？

——カルチャー・センターに通って少々哲学をかじってるのさ。

——ただでさえ減らず口をたたくのがうまいのに、哲学でへんな理屈まで身につけたら、怖いものなしでしょう。

——バカ言っちゃいけない。哲学は、人を説得するより自分で真理を究める学問だぜ。

——あなたが言うのと、たとえば本当でも嘘みたいに聞こえるわ。

——真理によって人を欺き、虚偽によって人を真理へと誘うとしたら、哲学にとって本望だろうね。

——どんなふうに？

——よくアマチュアのオーケストラの練習の時、間違えた音を出しても「だれですか？」みたいな素知らぬ顔をしてやり過ぎす人いるでしょう。でももっと手の込んだ手合いは、自分のほうから申告して「今のは私です」なんて率先して告白する奴だよ。そんな奴は、本当はその十倍くらい間違えているくせに、正直者の顔をしてるために、実際に九割方の間違いは他人に押しつけることができるのさ。

——それが真理によって欺くという手法ね。さすがは、うそつきのプロね。

——ときには神だって嘘をつくんだよ。預言者ヨナの話では、神がニネベの町の滅亡を預言せよとヨナに要求した。ところがヨナの預言を聞いて、ニネベの人々が悔い改めたんだな。

——つまり、ヨナの預言は実現しなかったのね。「つねに悪を欲して善をなす力」にどこか似ているわね。

——これに比べると、経済学者の予想はたちが悪いね。「トイレット・ペーパーがなくなる」と予想したら、その予想の影響によって、実際にトイレット・ペーパーが市場から姿を消す。

——それに対し、哲学の言説はヨナみたいだっていうの？

——それはどうか。ヨナの話のポイントは、やはり神の愛と知恵ということだろう。仏教では方便と言うらしいが、神はその愛ゆえにヨナに嘘をついたことになる。

——人間全体を救うためには、嘘も方便というわけね。神は慈愛に富むばかりではなく、人間を善導するためのしたたかな知恵もある。

——そう。ただしこれじゃ人間はまるで受け身のままの操り人形でしかない。何か抵抗も感じるな。

——神のように全知全能でなんでもお見透しの存在にとって、だれかを愛するなんてことができるのかしら。愛には、何か危険な賭けをするようなワクワクするようなスリルがあるじゃない？

——神の愛は、御隠居さんの盆栽いじりの趣味に似ているんだろうね。「これはなかなか枝振りがいい」なんて言いながら、けっこう無慈悲にチヨキンチヨキン切ったりするんだぜ。

——神様にも独自の美意識はあるんでしょうよ。でも神が全能なら、ドラマは始まらないわね。大事な枝を間違っって切り落として後悔するようなことがあるば、もうそれだけで一つの物語になるのに。

——もし全知の存在がいたら、多分時間というものに固有の意味がなくなるね。すべてが

お見透しで後悔することがないというのは、そういう意味だろう。神は永遠に永遠であつて、時間と交わらない。

——空間というのはどうかしら。

——神にとっても空間は空間だろう。

——それはどうか、空間てのは、場所の集まりでしょ。場所ってのは、そこに立つと他の場所が近くに見えたり遠くに見えたりする、そういう見晴らしを可能にするものよ。ところが神が全知全能であれば、どんな場所もいわば等距離に見えるんじゃない？ ちょうど無限遠の所から、無限の性能をもつ望遠鏡で見るように。

——なるほど。すると世界のどの場所も神から見れば一点に凝縮してしまつて、空間はないと。神というのは退屈なんだろうなあ。世界さえ、時間的にも空間的にも一点に凝縮しちゃうんだからね。

——そればかりか、神のような全知全能が可能なら、結局私たちの自由もただの無知の別名でしかなくなつてしまふでしょうね。

それにしても、何で神を全知だとか全能だとか見なしたがるのかしら。神とか神々を考へ出すのはなかなかのものだと認めるけど、全知とか全能と聞くと、金ピカの茶室を見ろみたいで、あんまりいい趣味だつて思わないもの。

——全知という観念は神から来たんじゃない、むしろ知識という観念自体に由来するんじゃないかな。われわれの知識というものを突き詰めて考えてみると、全知を想定したくなるんだよ。

——何かをそれだけ単独で知っているということはないの？

——そりゃできないでしょう。たとえば、そこに猫が眠っているってことだって、そっくりそれだけで単独に完結して知ってるわけにはいかない。

——言葉で表現される知識はどれも少なくとも言葉の知識は前提となっているけど、言葉ぬきの知識だってあるでしょう。たとえば、歯痛の場所とか、手の動かし方とか。

——だめだよ。歯痛の場所を知っている人は、痛みのない歯がどれかも知っていないくちやならないし、手の動かし方を知ってる人は、それが足の動かし方と違うことも知ってるはずでしょ。そんなふうにして、一つの知識は他の知識と連鎖的に関連しあっていてどこまでもつながっていくから、すべての知りうるものに結局はつながっていて、知らないものはなくなってしまうはずなんだ。

——でも、私たちは、自分が確実に知らないものもあることを知ってるでしょ。

——ほら、それだって何らかの意味で知ってるわけだろ。もし本当に知らないものが一つでも世の中に存在したら、われわれが知っていると言えるものも何一つなくなってしまう

のかもしれない。

——たしかに、知られていないと思われているものでも、すでにその輪郭が知られているわけよね。そしていよいよ輪郭がはっきりしてきたら、後はそれを勇気を持って名付けることでそれが知識の仲間入りをすることになるわけね。たとえば、すでに恋していることに初めて気づくときとか。「これが恋というものなのかしら」(ヴォイケ サペーテ……)なんてね。

——知を愛することからは必ずや全知の神の想定に導かれ、また全知の想定のもとではわれわれの自由の余地が存在しないとすると、愛智の方向をたどることは自由の否定に行き着くことになるね。

——実際そうじゃない？ 知識の立場は多くの場合自由の敵でしょう。昔から知識を独占しているときれた神官たちによって、人民の魂は呪縛されていたわけよ。神官たちがかってに引いた白墨の境界線から一步も出られずに。

——でもそれは本当の知識のせいじゃなくて、たんに知の権威のせいでしょう。

——同じようなものよ。政治学がこの世の形而上学を争うとしたら、形而上学は魂の政治を闘うわけじゃなくて。

——哲学は愛智と言われたりすることもあるけど、それは人を欺く看板にすぎないと、僕

は思うね。

——哲学者は知を求めることによって、権力を求めていたんじゃないの？ プラトンだってそうでしょう。現実の支配者になれなかった分、一層たちの悪い「魂の支配者」になろうとしたんじゃない？ 私はプラトンには、何かルサンチマン（怨恨）のような心性があるのを感じるな。

——確かに現実政治でさんざんひどい目にあっただらうな、彼は。シュラクーサイあたりで除名されたりパクられたり。

——よく左翼運動に挫折したような人が、哲学なんか逃避して、大学で教えていたりするでしょう。プラトンもきっとそういうタイプよ。ヘンに恨みがましくて、世間に対して観念で復讐してやろうとして、暗い情念が燃えてるの。お酒が入ったらインターとかワルシャワ労働歌なんか歌っちゃって、ジメジメ昔話するようなタイプ。よくいるでしょ、そんな男の腐ったような奴。

——いや哲学のおおもとは、ソクラテスやプラトンに始まるわけじゃないんだ。もっと地中海を広く一望すれば、晴れわたったイオニアの空と海にその源流が見つかるのさ。ホメロスだとかタレスだとか。タレスなんてのは痛快だぜ。変転常なき流水をもって世の実相とした。しかもその後に出たヘラクレイトスという奴が、二度と同じ水で風呂にはいるこ